



Title	大学礼拝における奨励についての一考察
Author(s)	田中, 勇二
Citation	基督教学, 28, 20-22
Issue Date	1993-07-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46533
Type	journal article
File Information	28_20-22.pdf



大学礼拝における奨励についての一考察

田 中 勇 二

序

今日、大学礼拝について種々の問題点が指摘される。

小論では、筆者が行なう奨励の一つの型（生活文化の森羅万象型）の構造について論じることとする。

一、時事文献

奨励の話者は聞き手と何らかの点において一致しなければならぬ。この一致点がないまま生の形で福音を語っても、神の言葉が聞き手の精神に到達する可能性は低くなる。それ故、時事的な文献から、複雑な知的操作を経ずに聞き手が興味深く感じる話題を、まず初めに選択することが良いと思われる。選ばれるべき話題を強いて分類すると三つになる。

第一には、人に衝撃を与えるような生き方をしている人物を取り上げることができる。第二には、ユーモアに

富んだ話題である。礼拝における緊張はユーモアによって逆説的にその質を高め得る、と考えることが可能である。宮田光雄氏の『キリスト教と笑い』という書物はこの点において示唆的である。第三には、美的に洗練された話題である。日本の基督教主義の大学の構成員は総じて、都市的生活に対する理解を持っており、都市文化に関わる話題に好意的であるからである。

以上、三点の話題を新聞、雑誌をはじめ現代詩歌、現代小説、また文献ではないがそれを補うものとしての映画、音楽、美術作品から選ぶわけである。

二、時代精神

時事文献ないしそれに準ずる諸文化より、聞き手が熟知している話題を選択しかつ論じても、その話題が浮遊する論理レヴェルに留まっていれば、それは単なる饒舌に墮する危険性がある。任意に選択した話題をめぐる現実を言わば仮想現実仮想現実として、思索を重ね、本質を抽出しなければならない。

例えばラーメンを話題に選ぶと、種々の具ではなく、生命としてのスープに着目することによって、華美な世

俗性に埋没する時代精神を批判し、本質を探究する精神性が大切である、という風に話を展開させることができる。かくして、卑近なフーメンの話が、我々にとつて「なくてはならぬものは多くはない、いや一つだけである」という御言葉へと結び付いていくのである。

抽出された本質は、時代精神を具現する程にある程度の普通性を有していなければならぬ。聞き手は時代の子であり、必ず時代精神に影響を受けている。従つて、時代精神と関わりの深い本質抽出作業により、聞き手との対話がより良くなされる。この点において、吉本隆明氏の「現在」探究の業績や山崎正和氏の文明批評の仕事から学ぶところが大である。

話者が時代精神と関わりの深い本質を聞き手が馴染んでいる具体的話題から抽出しても、聞き手はその本質的なものを予め意識しているとは限らない。話者はこの無意識を別決し、これと対話することができれば、アルキメデスが発見の叫びをした時と類似の驚愕の一瞬を聞き手は持つことができ、話者の語る象徴的宇宙の世界に深く沈潜することが可能となる。

三、現代思想↓哲学史

聞き手が話者の語る世界に沈潜すると、両者の対話の場が構築されたことになる。後は聞き手が了解し得るような言葉を用いて対話を進めることが大切である。その際、話者は聞き手の無意識を可能な限り、単純な形に変形しなければならない。一口に、キャッチフレーズ化が必要である。何故なら、無意識の有する複雑な固有のユアンスが伝播するのは、その単純な一般化を媒介してこそである、という消息があるからである。

聞き手が無意識的に何らかのイズムを保持している時がある。その種の聞き手の存在が自明である折には、多少なりとも話は論争的になる。話者は奨励が行なわれる大学の思想的状況ないしは非思想的状況をよく検討して何らかのイズムが優勢である場合は、それを取り上げ批判的に検討することが期待される。

次に話者が潜在的な形であれ顕在的な形であれ、聞き手が有する思想的立場を把握したならば、そのイズムをでき得る限り原理化し、最も基本的な形に還元することが必要である。一口に、現代思想の哲学化である。かく

して、話者は聞き手の個性を超えた次元で聞き手全体と対話することが可能となり、ひいては聞き手との深いレヴェルでの対話が可能となる。

四、マクロ理論

マクロ理論という用語の意味するところは、旧約神学と新約神学の整合的統一体としての全聖書神学が、父・御子・御霊の三一論的神学と結合されたものである。前者をマクロ理論 α 、後者をマクロ理論 β と命名する。 α と β のそれぞれの内部において、社会状況その他の偶発的事情において強調点が移動することがあっても、 α と β の結合体としてのマクロ理論は均衡を保ちつつ整合体を示す、という仮説を筆者は有する。別様に表現すると、旧・新約聖書を貫く一貫したロゴスが、三一論的構造を持った神学に論理的に結び付きつつ、均衡体を維持する、という立場が聖書のマクロ理論と呼ぶべきものである。福音伝道の際には、表層構造においては聖書の個々の箇所ないしキリスト教神学の一部が活用されるが、深層構造の基底において常にマクロ理論が作動していないと話者のキリスト教的肉に基づく、つまり宗教性の内にも潜

む人間の罪を媒介とする恣意性によって、伝えられるべきキリスト教信仰が変質する可能性が生じる。

話者は、マクロ理論を念頭に置きつつ、聞き手が意識的であれ無意識的であれ、抱くところの哲学を相対化しつつ、聞き手をキリスト教信仰の世界の中に招き入れ、聞き手をキリスト教シンパないし、キリスト教徒にする、というのが筆者の奨励における福音伝道の一つのパターンである。

五、まとめ

信仰の世界は、幼子の心のように単純なものである。しかし、この単純な信仰を伝えるためには、ロゴスによる愛の努力を媒介とする霊的現実への可能な限りの神学的接近が必要である。